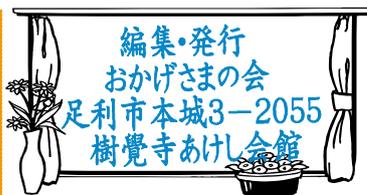


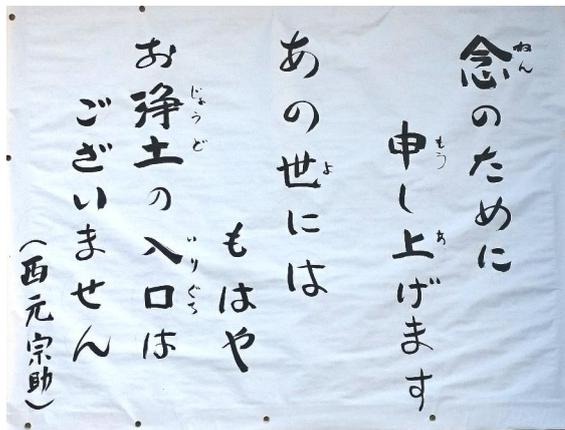
おかげさま



右の写真、ご覧になられた方もおられると思います。樹覚寺山門前の駐車場にあります掲示板にある言葉です。

この言葉は、京都府立大名誉教授故西元宗助先生にしもとそうすけの言葉の一部です。掲示板そうすけつごう わかに書く都合で分りづらくなってしまったようです。ごめんなさい。

此の世はお浄土ではありません
 されど、お浄土の入り口は
 この娑婆しゃばに この現実げんじつに
 この現前げんぜんの一念いちねんに開かれております
 念ねんのために申し上げもうしあげます
 あの世よにはもはや
 お浄土じょうどの入り口いりぐちはございません



私たちは、死への不安と別れの悲しみを抱いて生きています。たとえ一見無関係かんけいのように思えても、釈尊しゃくそんの説かれた「一切皆苦」の教えから飛び出すことはできません。苦とは無関係えんのように思えても、縁えんにあえば何時いつでも現前げんぜんに出現しゅつします。私たちは四苦八苦しくはっくの現実げんじつを逃れることはできないのです。感じ方の如何いかんに関わらず、不安と悲しみを抱いた人生いだを生きているのです。

釈尊は、「天上天下唯我独尊 三界皆苦吾当安之てんじょうてんげゆいがどくそん さんがいかいごくどうあんし (天上天下に唯だ我れ独り尊とし、三界はみな苦なり吾まさに之を安んずべし)」とお生まれになりました。「この大空と大地の中で、最も尊敬される生き方を知りたい者は私を知るべきである…」。その生き方とは「世界中は苦しみに満ちている。私はそれらを安らかならしめるために出現しゅつげんした」と仰言おっしゃっておられます。一切いっさいのものが苦から救われてゆく道、歩むべき教えを説かれました。

仏法ぶつぽうです。仏教ぶつたうです。仏陀ぶつだの説かれた教えです。仏陀になる教えです。仏陀なに成らせていただく教えです。

仏教の教えの要を、三法印と示されています。仏教の法の3つの旗印です。
 「諸行無常」「諸法無我」「涅槃寂靜」の3つです。これを外したらもはや
 仏教、釈尊の説かれた教えとはいえないのです。「無常・無我」は、真実の
 姿を示しています。「涅槃」というのは、「ニルバーナ」、一切の煩惱が吹
 き消された状態、悟りの境地です。仏陀の境地です。それは、私たちの歩む
 べき真実の生き方、真実に至る方法、方向を示しています。

釈尊は、人生の意義をも知らず、歩むべき方向をも知らず、如何に歩みを
 進めたらよいかをも知らずに生きている私に、生きるべき方向と如何に生き
 るべきかを教えてくださったのです。そのために、教えのなかに、生き方と
 して様々な修行が説かれているのです。お分かりですか、修行は全て悟りに
 至るための方法、生き方なのです。

釈尊は、真実の生き方を、「涅槃」と示されました。

七高僧さまは、釈尊の数多く説かれた涅槃への道の中より、念仏の道を選
 択、選びとってくださいました。曇鸞さまは本願他力、善導さまは本願念仏、
 そして源空さまは念仏往生とお示しになられ、往生浄土の道こそが間違いの
 ない真実の道とお届け下さいました。

源空さまのお示しのなされた、往生浄土の道を、親鸞さまは、現生
 正定聚と開かれました。現生の歩みが、念仏とともに歩ませていただく道で
 あり、往生浄土の道であります。それが御本願、阿弥陀さまの願われた生き
 方であり、ご本願の歩みであると、自ら歩まれました。

それまで多くの人たちに受け入れられてきた、いや今でも多くの方が漠然
 と考えておられる、娑婆の縁が尽きると往生浄土の歩みが始まるのではない。
 死出の旅装束(巡礼姿)、手甲脚絆草鞋姿で杖を持
 ち、十万億仏土を超えてゆく旅に出るのではないの
 です。即得往生住不退転の道を歩まれたのです。

つまり、娑婆の縁が尽きると即の時に往生浄土
 (おさとの歩み) であります。ご本願に遇った
 一念(その時)に往生浄土(ましがいなくおさとり
 へむかう歩み)が始まっているのです。今現在生き



ている歩みが念仏とともにある歩み、往生浄土の歩みなのです。

今歩んでいる歩みが念仏とともにある歩み、間違いなくお浄土への歩みです。それでは、お浄土の入り口は何処(どこ)でしょうか。そう、娑婆(しゃば)にあるのです、ご本願(ほんがん)に遇(あ)った一念(いちねん)にあるのです。

お浄土往きのチケットを貰(もら)ったのではないのです。チケットを持っていても乗り遅れたらそれまでですよ。何か間違いないものを貰(もら)ったのではなく、今の娑婆の歩みがそのまま往生浄土の歩みとなっているのです。

あの世で旅をするのじゃないんです。阿弥陀さまの誓いは、後ほどあの世で履行(りこう)されるなんてあやふやなものではないのです。今現に履行(りこう)されているのです。今現在説法、なのです。

死にたくはない
未練もある
でも不安はない
いき先がある

共に往生浄土の歩みをするなかまを、御同行(おんどうぎょう) 御同朋(おんどうぼう)ともうします。同じ時代に生まれ、同じ地球に生き、同じお浄土に向かって歩みを進める大安心(だいあんしん)のなかまであります。

共に歩みましょう、共に伝えましょう、南無阿弥陀仏の安心の道を。

あけし酔話

皆さんはお寺の生活ってご存知(ぞんじ)でしょうか。漠然(もくぜん)としかご存(ぞん)じない。あっ、そうですね。



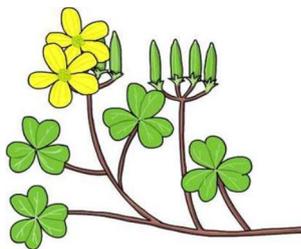
浄土真宗のお寺には、住職・坊守・寺族が住んでいます。それらの人の住み込みで行うお仕事といたしますと、第一には、本堂にご安置してあります五尊様(ごほんぞんさま、ごんかいさんさま、ぜんちしきさま[ぜんじうじょうじん])、お太子様、七高僧様(ななたかそうさま)のお給仕、身の回りのお手伝い(てだんい)をすることです。広如上人(くわにじょうじん)は「示時偈(じしぎ)の中で、「木畫(もくが)の尊像(そんざう) 之(これ)を拝(を)すること真(ま)の如(ごと)くせよ」と言(い)っておられます。第二に、おうやまいの心(こころ)を形(かたち)で表(あらわ)すこと、報恩講(ほうおんこう)をはじめとする法要(ほふよう)を行うこと(こと)です。第三に、この寺(てら)を護持(ごぢ)されてきた方々(かたがた)への感謝(かんしゃ)の心(こころ)を形(かたち)で表(あらわ)す、年忌月忌(としつきげつき)などの法要(ほふよう)を行うこと(こと)です。

樹覚寺(じゆかくてら)の一日(いちにち)は、朝(あ)6時(じ)の開門(かいもん)と衆会鐘(しゆかいかね)で始(は)まります。もちろん裏方(うらほう)の仕事(しごと)は5時前(ごじまへ)からたくさんあります。衆会鐘(しゆかいかね)に引き続(ひ)き本堂(ほんどう)では、御仏飯(ごぶつめし)が上(あ)がり、お晨朝(あした)のお勤め(ごんめ)が始(は)まります。日本中(にっぽんぢゆう)何処(どこ)の浄土真宗(じゆつしんしゆう)のお寺(てら)で勤(ごん)まる、「正信偈(せいしんぎ)六首引(むくしゅびき)」です。朔日(しつじつ)(毎月(毎月)1日)には、晨朝講(あしたこう)の皆さん(みなさん)がお出(い)でになり、晨朝法要(あしたほふよう)が勤(ごん)まります。



あけし あれこれ

カタバミ (酢漿草)



暖かくなり、ひと雨降るごとに草の芽が出始め、あつという間に蓄を付けています。これからは草との競争です。小さな5弁の花びらに、ハート形の葉でちょっとかわいい草なのですが、これがまず一番にとってもいいほど、早くに芽を出し伸びてきます。石畳の小さな隙間にもちゃんと顔を出します。

カタバミ (酢漿草・酸い物草)

カタバミ科。多年草。

取っても取っても生えてくる。芽生えた小さいうちは簡単に引き抜けるが、しっかりと根を張ってしまうと、引き抜こうとすると根元で千切



れてしまい、根本が残ると、そこからすぐに根を出してしまい元の木阿弥となる。円柱形の果実を上向きに立て、熟すると小さな種子を勢いよく飛ばす。葉はクローバーに似た小さいハート形の3枚の複葉で、夜になると主脈を中心に葉をたたんで眠るという面白い習性がある。花は径1 cmにも満たない5弁の小さな黄色花で、意外に可愛い。やはり夜には閉じる。

普通のカタバミの葉は緑色だが、葉が赤茶色のアカカタバミがあり、カタバミの一変種とされて、育つ環境が異なり、カタバミはどこにでも生えるが、アカカタバミは日当たりのよい砂利道など、夏には焼けるように熱くなるようなところに好んで生える。花の色も黄色単色ではなく、花底部が赤く、赤い輪が入っているように見えて、意外にチャーミングな色合いである。観賞用に栽培されている種類もあり、種類が非常に多い。

カタバミは漢字の名のごとく、茎葉にしゅう酸を含み、酸っぱいことに由来する。昔は葉で仏具などを磨いたという。痔や脱肛の時に、この葉を煎じて患部を洗ったり、火傷の時に塗っても効くと云われ、腫物の時の張り薬としても使われてきた。いわば外用の民間薬として利用されていたようだ。